

近江の「サンヤレ」から見えてくるもの

—大津市真野の「サンヤレ祭り」と栗東市大宝神社の「サンヤレ踊り」を例に—

加藤 賢治

近江の「サンヤレ」から見てくるもの

—大津市真野の「サンヤレ祭り」と栗東市大宝神社の「サンヤレ踊り」を例に—

加藤 賢治

はじめに

近世からの伝統を受け継ぐ旧集落の中で、JRの駅に近く都市化が進んだ新興住宅地と隣接する地域では、伝統的な祭礼が簡略化され、消えてしまった所作や行事なども散見される。一方で、近年それらの地域で歴史・文化の再検証や地域の活性化を目的として消滅した行事を復活させようという動きも見られる。この論考は、祭礼の組織や所作、行事が省略されながらも受け継がれている大津市真野の「サンヤレ祭り」と、一旦完全に消えてしまった踊りを復活させた栗東市大宝神社の「サンヤレ踊り」の復活譚を中心に取り上げ、「サンヤレ」という名称でつながる実際の祭礼行事を報告するとともに、行事を継承することや、復活することによる地域の変化を検証するものである。

第一章 サンヤレとは

(一) 京道上賀茂の「さんやれ祭り」

民俗研究において「サンヤレ」とは、囃子詞を指し、黒川道祐が編纂した江戸時代前期の京都の民俗行事を解説した『日次

Name :
Kenji KATOH

Title :
The “Sanyare” of Omi: What We Can Learn through the Examples of the Sanyare Festival in Ostu City, Mano, and the Sanyare Dance of Ritto City’s Daiho Shrine

Summary :
Hayashikotoba refers to a word or phrase called out to those dancing in a festival to coordinate their movements. The Sanyare Dance and Sanyare Festival, held in every region of Shiga Prefecture, originated from the *hayashikotoba* “sanyare”. This paper offers an overview of “sanyare”, said to have originated in Kyoto, and reports on what we can learn by looking at the revival of the Sanyare Dance, which had once died out.

「紀事」によると、江戸時代の初め、京都の各地に「幸在」と唱える行事が多数あったことが記されており、「幸在」すなわち「さちあれ」が「サンヤレ」という囃子詞となったと想像出来る。

現在も京都市北区上賀茂に「さんやれ祭り」という祭礼が伝承されている。十五歳となつて子供組から抜ける少年たちを祝うという目的で毎年二月二十四日に行われる^①。各町内の子供組は、小学生から十五歳までの子供たちで編成され、十五歳になると「アガリ」という役を務めて子供組から抜ける。祭礼当日は、午前中に「アガリ」の自宅などに参加者が集まり、会食後、家を出て行列をつくり、途中各地域の氏神や街角の祠などを巡礼しながら、上賀茂神社に向かう。その行列には「サンヤレ」という囃子方（太鼓と鉦）が加わる。

京都には、他に修学院鷲の森神社や一乗寺八大神社に「サンヤレ祭り」という春祭りが行われている。

(二) 近江におけるサンヤレ

近江（滋賀県）にも「サンヤレ」という言葉が登場する祭礼が各地に伝わっている。

草津市の下笠・志那・志那中・片岡・吉田・長束・矢倉の七つの地区では五月三日に「サンヤレ踊り（国選択無形民俗文化財）」と呼ばれる太鼓踊りが奉納される。大津市真野地域では一月十七日の夜に、十七夜という祭礼が行われる。その祭りは、松明行列の奉納の際に、「サンヤレ・サンヤレ」という掛け声

がかけられるため、「サンヤレ祭り」と呼ばれている。

高島市の酒波地区の日置神社と北仰地区の津野神社の両社の祭礼である「川上祭り」は別名「サンヤレ祭り」と呼ばれ、四月十八日に開催される。その際、稲穂を表した竹製の小さい幟を「サンヤレ」と呼び、踊り子である子供達が地面に叩きつける所作が披露される。

守山市吉見の馬路石邊神社の豊年踊りには、サンヤレという囃子詞が入っているために「サンヤレ踊り」と呼ばれている。

同じく守山市の小津神社の「長刀祭り」にも薙刀降りとともに「サンヤレ踊り」が披露される。

そして、栗東市の大宝神社では、例大祭でかつて踊られていたという「サンヤレ踊り」が復活した。

サンヤレの起源は、先述の『日次紀事』によると京都を発祥とし、室町時代後半から江戸時代の初めにかけて流行した風流囃子物であると考えられる。

風流すなわち派手な衣装や軽快なリズムに合わせたの踊りは、京都のような都市部に流行する疫病を鎮める祈りが込められている。近世のはじめ、サンヤレ踊りは、見物人に新鮮な印象を与え、近江へは東海道や中山道を通じて伝わり流行した。しかし、同時に恐ろしい疫病も主要街道を通じて伝染したとも考えられる。そのような中で、厄災から地域を守るという意味も含み、一気に近江の各地に広がったのであろう。それらの一部が、草津や守山、大宝神社の「サンヤレ踊り」であり、今も五穀豊

穰とともに疫病退散を祈る奉納踊りとして守り伝えられているのである。

しかし、興味深いのはその起源であるとされる現在の京都市賀茂に伝わる「さんやれ祭り」は、派手な踊りや衣装の登場はなく、祭りの意味合いは十五歳となった青年を一人前の大人として迎え入れ神様に報告する儀式となっている。これは、大津市真野の「サンヤレ祭り」と共通する点である。真野の「サンヤレ祭り」は、風流囃子物という派手な踊りは登場しない。ムラ入りの儀式がその目的であり、「サンヤレ・サンヤレ」という囃子詞が特徴である。

次章では、まず大津市真野の「サンヤレ祭り」を眺めてみることにする。

第二章 大津市真野のサンヤレ祭り

(一) サンヤレ祭りの起こり

大津市真野地区には、上と下の二つの神田神社が存在し、下の神田神社は真野沢村、中村、北村、浜村の四つの集落が氏子圏となる。現在、氏子の戸数は全て合わせて一七〇戸を数える^②。

ここで取り上げた真野のサンヤレ祭りは、下の神田神社で行われる沢村、中村、北村が参加する祭りである。かつては浜村も参加していたが、時期と理由は不明であるが、現在は参加していない。

真野におけるサンヤレ祭りの起こりについては、江戸時代の後半に当時字藤ノ木^③に鎮座していた神田神社が、真野川の水害を避けるため、現在の場所に遷座された時、村人たちが多くの松明を抱えて神の先導役を担いその松明行列がもととなったと言われている。

また、別に室町時代に真野地域一帯を支配していた豪族真野十左衛門元定の後裔がはじめたという伝承もある。元定は、元龜元年（一五七〇）織田信長によって滅ぼされたと言われるが、その子孫は長らくこの地に留まり、沢村を領地とした旗本神保氏の代官を務めたとされる。そのことを考慮すると、サンヤレ祭りは、真野一族の同族祭としてはじめられ、真野一族が没落後、沢村の地縁的な村祭りとして引き継がれたと考えられる。

今では、沢村の役人が大太鼓や鉦、大松明を扱い中心的に祭礼を進行し、北村と中村は松明行列に参加するのみという形式を見ても、近世に沢村の代官を務めた真野氏との関わりが深いと考えられる。神田神社の遷座の際の松明行列が起源であるというのは、真野氏が滅び沢村の祭礼となって以降に語られるようになったのであろう。

(二) サンヤレ祭りの組織

真野地域の人々は、この祭りを毎年十七日の夜に行われるため、「十七夜」と呼ぶこともあるが、先述したように、囃子言葉である「サンヤレ」という掛け声を太鼓と鉦に合わせて発す

るので、「サンヤレ祭り」という名前が定着している。祭りの目的は、先述の京都上賀茂の「さんやれ祭り」に近く、沢村の成年男子の烏帽子儀、すなわち元服式（成人式）がその中心となる。いわゆる烏帽子料を支払ってのムラ入りの意味合いがある。しかしながら現在、その儀式は行われていない。稀に他の地域から転居してきた人が何年間か定住し、希望があれば正式にムラ入りとする事例があったが、近年はほぼそれも無くなったという。

サンヤレ祭りの組織は、⑦「下七人」、①「上七人」、⑨「十人衆」にわかれ、すべて沢村の氏子（男子）が担う。ムラ入りすれば、⑦から⑨の順に役に就いていくことになる。

⑦「下七人」は、サンヤレ祭りの中心を担う七名の若者を言う。衣装は、黒のモンペに赤い帽子をかぶるのが特徴である。赤い帽子は烏帽子と呼ばれ、ちょんまげのイメージがあるのではないかともいわれている。彼らは、大太鼓と鉦を打ち鳴らし、大松明を持つ役割を担う。現在は、「サンヤレ・サンヤレ」という掛け声があるものの、静かに松明行列とともに歩くという雰囲気であるが、かつては、太鼓も松明も暴れまわり、新たにムラ入りした若者の大きな試練の場となったという。

①「上七人」は、「下七人」として七年間一つ一つの役割を経たものが、その末席に着く。衣装は羽織袴である。役割は、「下七人」の指導や、松明行列の警護などを務める。最上位の者は「カシラ」と呼ばれ、はじめて上七人となったものは、「オサエ」

という役割を担って、行列の最後を見守るのである。

⑨「十人衆」は、上七人、下七人を経験したいいわゆる沢村の長老たちがその役に就く。役割は、「サンヤレ祭り」がはじまり、終了するまで自宅で待機するというものである。太鼓が止むと何か問題が起こったと察知して、家を出るが、それ以外は太鼓の音を聞きながらその無事を確認し、待機するのである。よって、太鼓たたきは、祭礼の間、決して太鼓をむやみに止めることはできない。

そして、これらの役の他に「アルキ」という役割のものがあ。雑用係と言われ、服装は普段着であるが、この「アルキ」は、沢村以外にも、中村、北村にも存在し、神の使いとして提灯を持って行列に参加し、三つの集落の氏子をつなぐ連絡役を担う。特に、沢村のアルキは、北村の行列への参加を促すため、「七度半の使い」という役割を果たし、三重の重箱と銚子、杯も手配する。

(三) 現在のサンヤレ祭りの流れ

一月十六日には、沢村、北村、中村の各家でハサ竹（稲木竹）を素材とした松明が一本ずつつくられる。下七人は、沢村の浄国寺の境内で大松明をつくる。竹はあらかじめ、火をつけた時に破裂しないよう節を割っておく。竹数本を束ね、それらを縄で丁寧に縛り完成である。そして、翌十七日、午後七時頃に浄国寺に沢村の下七人、上七人が集まり、太鼓の合図で沢村の各

家からも松明を持った人々が松明に火を付けにやってくる。大松明にも火がつくと、行列は神田神社に向かって出発する。

途中に藤の木と呼ばれる丁字路で行列は止まる。ここは、沢北、中の三集落が集まる場所となっている。沢村が藤の木に到着した時には、すでに中村の一行は到着しており、追って北村が合流した。各集落のアルキが集合を確認すると、神田神社の宮司を藤の木に迎え入れる。その後、大太鼓と鉦が激しく叩かれながら、上七人のオサエ役が、扇子を広げて「ワーツ」と掛け声を三度発すると、一斉に神田神社に向かって行列が進み始める。

大太鼓と鉦を叩く下七人は、「サンヤレ・サンヤレ」と囃子詞をかけながらゆっくり進んでいく。

沢村が先頭で境内に入ると、拝殿に向かって右側に大太鼓が置かれ、その前に松明は燃えている方を中央に揃えて放射状に置く。そして上七人と下七人は本殿の周りを三回まわる。ついで、中村が境内に入り、同じく松明を放射状に並べ、北村もそれに倣って松明を置いた。大太鼓は鳴り止まないように叩き役を変えながら叩き続け、拝殿で宮司が祝詞を奏上する。

祝詞が終わると各集落のアルキが上七人、下七人をはじめ、参拝者一人ひとりに神酒を勧める。

八時半頃、オサエ役が、扇子を広げて「ワーツ」「ワーツ」「ワーツ」と三度発すると、沢村の氏子は大太鼓と鉦を先頭に、それぞれが境内を降りて手水舎の前に集まる。オサエが

「ワーツ」と再び発すると、大太鼓と鉦が鳴り止み、アルキがエビや数の子が入った重箱を下七人の太鼓叩きに勧める。その後、静寂な中、謡曲を上手に謡うことができる年長の氏子が登場し、「千秋楽」が謡われる。それが終了するとサンヤレの言葉がかけられ、再度大太鼓と鉦が威勢良く叩かれ、最後にオサエが「ワーツ」と大きな声を上げると、太鼓が鳴り止んで祭りは終了し、氏子たちはそれぞれの家路につくのである。

(四) 生活スタイルに合わせて合理化されるサンヤレ祭り

以上が、基本的なサンヤレ祭りの組織と役割、そして平成三十一年(二〇一九)の祭りの全容である。現在のサンヤレ祭りでは、下七人の役割は、太鼓が暴れるという所作が無いこと以外はほぼ変わらないが、上七人は、本来七名のところが、二名のみであり、十人衆は全く存在しない。アルキは三集落に一人ずつ設定され、連携の役割を遂行しているが、「七度半の使い」^④は行われていない。

全体の参加者の数は少なく、昭和五十三年(一九七八)の記録によると、参加した各家が持ち込んだ松明の数は、沢村五七本、中村七九本、北村二六本であったが、平成三十一年は、その三分の一ほどの本数であった。人手不足や、祭りの簡略化の流れで、所作などは省略され、かつては大太鼓が神輿のように踊り狂ったというが、それに比べると祭りとしての全体は肅々と遂行され、静謐で幻想的な火祭りといえようか。

今回の取材では、神田神社の平野修保宮司とサンヤレ祭りを含む沢村の地域活動に取り組む川中常夫氏に話を聞いた。徐々に参加者が少なくなると、祭りの所作の省略や、組織の合理的な運用がなされている現状が語られた。ただ、祭り自体は今の生活スタイルに合わせて合理化されるようになったが、この地域の歴史が垣間見られ、世代を超えて地域の人々がつながるといふ姿を見ることが出来る。今年の祭りの中で、数人の子供達が小ぶりの松明を持って行列に参加する姿も見られた。平野宮司と川中氏の話から、この祭礼をなんとかして地域のアイデンティティとして受け継ぎ、次世代につないでいきたいという強い意志を感じた。

次章では、一旦消えてしまった「サンヤレ踊り」という所作を復活させたという栗東市の大宝神社の事例を紹介してみた。



平野宮司が地域の交流の場という神田神社



藤ノ木で下七人が大太鼓を叩く



祭り締めくくりに謡曲「千秋楽」が詠われる



浄国寺付近で待機する沢村の松明



沢村を先頭に松明行列が神田神社に入る

第三章 大宝神社のサンヤレ踊り復活譚

(一) 大宝神社と例大祭

栗東市の大宝神社は、明治時代以前、大宝天王宮、今宮応天大神宮と呼ばれ祭神を牛頭天王として信仰を集め、総（へそ）村五郷や、笠川村、今宿村、上・下勾村をはじめ、近郷（旧栗太郡内のすべて）五〇ヶ村に及ぶ氏子圏を持っていた。

伝承によると、大宝元年（七〇一）に総村を中心に疫病が流行し、人々が祈ったところ終息した。翌年から、疫病が流行ることを恐れて例祭が開催されるようになったという。以後どのように変遷してきたか詳しいことは不明であるが、寒川辰清著

『近江輿地志略』に、大宝神社は「大寶天王社」と称され、

「卯月初子日御祭礼」と記されていることから、江戸時代には四月の初めの子（ね）の日に、祭礼が催されていたことがわかる。

現在の祭神は素戔鳴尊^{スサノヘノミコト}であり、約三〇の旧字地域を氏子の範囲として、五月四日に例大祭が行われている。三基の神輿（守山地域・大宝地域・



栗東市総（へそ）の大宝神社

治田地域)、一基のさつき神輿(女性神輿)が出る盛大な祭礼である。

(二) サンヤレ踊り復活譚

大宝神社の例大祭には、草津地域に見られるような疫病退散という京都の影響を受けた風流囃子物である「サンヤレ踊り」が、賑やかに奉納されていたと考えられる。この章では、その踊りを平成二十八年(二〇一六)に復活させた人物を取材した。

その人物とは、大宝神社の氏子地域である栗東市笠川地区に在住する西村久氏である。西村氏は、地域の民俗行事に興味を持ち、大宝神社の祭礼だけでなく、滋賀県内の様々な祭礼を検証し、その特異性を、インターネットを介して広く発信している^⑤。

西村氏は、平成二十六年(二〇一四)度のレイカディア大学^⑥で、自らが暮らす地域を調査して発表したことがきっかけとなり、大宝神社の「サンヤレ踊り」を復活させた。

西村氏が暮らす笠川地域は、JR栗東駅に近いいため、新興住宅地として開発が進み、懐かしい田畑が広がる風景はなくなり、旧中山道もその面影を見ることは難しくなっている。しかし、西村氏はこの場所にも古くから受け継がれた豊かな歴史と文化があったはずであり、新しく移り住んできた人々たちにも愛着を持ってもらえる地域でありたいという思いから、平成二十七年(二〇一五)、笠川地区を中心に古老に呼びかけ、七名の古老

と「まちづくりの会（現・サンヤレ踊り保存会）」を発足させた。当初は、月一度集まりを持って、忘れ去られようとしている懐かしい地域の風景を聞き取りによって再現する「ふるさと絵図」の制作と、栗太郡史に掲載されていた今は無き「サンヤレ踊り」の復活という二つの目標を掲げたという。

地域の歴史を紐解いていく作業を始めると、様々な資料が出てくる。偶然にも、レイカディア大学の先輩から、「サンヤレ踊り」の唄が入ったカセットテープを譲り受けていたことを思い出し、聞き直す。山本わゑさんという当時八十九歳のおばあさんが唄うサンヤレ踊りの節。わゑさんと同じようにみんなと唄うと、踊ることも可能ではないかと真面目に思い始めた。そして、草津地域の「サンヤレ踊り」を調査するなどしながら大宝神社の「サンヤレ踊り」を復活させようという機運が高まっていた。

そこから、一年後の例大祭での「サンヤレ踊り」復活に向けて「まちづくりの会」が具体的に動き始めた。しかし、「サンヤレ踊り」には、唄、太鼓、鉦、笛、踊りという五つの要素があ



大宝神社の「サンヤレ踊り」の歌が収録されているカセットテープ

る。西村氏にとってもまちづくりの会の古老らも、その全てがはじめてのものであった。

そして、平成二十七年（二〇一五）十二月に地域住民を対象とした「サンヤレ踊り」の復活に向けた説明会を四度実施したが、全住民の二割程度の参加しかなく、その意識の低さに愕然とする。山本わゑさんの唄に合わせて太鼓を叩いてもらおうと、太鼓を叩く市民グループに依頼し、唄を基調とした太鼓、笛、鉦の合わせ方の指導を受けた。しかし、草津地域のサンヤレ踊り保存会の協力は得ることができず、一旦は当年五月例祭での復活を断念しようかと思つたという。

ただ、機運が高まっている今年でできないことは、何年たつ



復活したサンヤレ踊り1



復活したサンヤレ踊り2

てもできないという信念を持って、困難の中、取り組みを進めた。すると、横笛を担当してくれる方との出会いがあり、草津のサンヤレ踊りの楽譜がつくられた。そして中学生の吹奏楽部がそれに応えてくれる。太鼓を担当する方が現れ、小学生と太鼓を叩き始める。平成二十八年（二〇一六）三月、今年できる範囲でやると決意し、五月四日の当日に向けて、法被（衣装）はどうする、踊りの振り付けは……。期日が迫る中、一気に大宝神社の「サンヤレ踊り」はかたちづくられていった。

そして、見事にこの年の例大祭で「サンヤレ踊り」は復活を果たしたのである。新元号となる二〇一九年の五月四日、四度目の「サンヤレ踊り」を見ることができた。

まとめ サンヤレ踊りの復活から見えてくるもの

近年、筆者が知る範囲においても、草津市小汐井神社の狐踊りや近江八幡市浅小井今宮天満神社の祇園祭におけるお囃子の復活など、一旦消えてしまった祭礼行事を復活させようとする動きが各地で見られる。おそらく小さな所作の復活などを含めると、滋賀県内においてかなりの数の事例を紹介することができるのではないかと感じる。一方で、祭礼行事をできるだけ簡素化しながら祭りの根幹だけは守ろうとする動きや、完全に消滅してしまった悲しい祭礼の話聞くこともある。

地域の高齢化や、人口減少によって、これまでできていたこ

とができなくなるといことが、どの地域においても見られる。しかし、地域の活力が無くなり、地域の人々のつながりが希薄となってきたことで、自分が暮らす地域に誇りを持って、ここに暮らして良かったと思えるような場所にしたいと願う人々が増えてきていることも事実である。

今回、「サンヤレ踊り」を復活させた西村久氏は、そのうちの一人である。事実、無くなったものを復活させることの難しさはあったが、ゼロから始めることで、様々な人との出会いがあり、思いがあり、それらが結びつくことで、新しいものが生まれるという貴重な体験ができたと取材を通して語っておられた。

伝統的な祭礼には、様々な決まりごとがある。「女性や子供は神輿を担ぐことができない。踊りに参加できない。行事が平日や深夜に行われる。他の地域から移住してきた人は参加できない。費用がかさむ。」など現代社会の秩序や暮らしの様式に合致しない行事や所作があり、それらが徐々に省略され合理化されている。

復活した行事については、そのような難しい縛りはなく、現代の暮らしに即した内容となっている。女性や子供たちが参加しやすく、男女を問わず様々な年齢層の人々の交流が見られる。また、移住者の受け入れにも問題がない。

草津市小汐井神社の狐踊りは、神社の宮司さんと熱心な氏子総代が核となって、復活したが、大人に混じって地域の小学生

が踊りに参加できる。地域の小学校では、先生がこの踊りに興味を持ち、学校で習って地域のイベントで披露することもあるという。祭礼行事が教育の一環として扱われることは非常に有意義である。祭礼の時以外にも、この踊りが地域の文化として広がったのである。

また、子供達が参加するとそこにお父さん、お母さん、そしておじいちゃん、おばあちゃんとともに参加することになる。世代を超えた縦のつながりと同時に他の家族との交流すなわち横のつながりも密になる。

このように、新しく復活した行事には、様々な可能性があるといえよう。

真野のサンヤレ祭りは、今の所、所作を復活させようという具体的な動きは見られないが、神田神社の平野宮司は、神社は地域の拠点であらねばならないと強調されていた。地域には独自の歴史や文化があり、多くの人々の暮らしがある。神社の境内で、地域の人々が出店する露店を出すなどする現代の祭り(イベント)が行われる場所にしたいとい



大宝神社サンヤレ踊り集合写真

う思いを語られていた。

伝統的行事を継承していくことや、消えた行事を復活させるという物語に、正しいやり方というものが存在するわけではない。ただ、伝統行事自体がその地域のアイデンティティあり、そこに暮らす人々が集まる機会であることには違いない。地域の人々が知恵を出しながら、祭礼行事を変化させつつも維持していく方法を、常に探っていかなければならないのであろう。

おわりに

今回、取材でお世話になった大津市真野神田神社宮司の平野修保様、真野沢村の地域活動に取り組む川中常夫様、そしてサンヤレ踊りを復活させた栗東市笠川の西村久様は、地域の核となる人材だと確信しました。地域に対する具体的な思いは、お一人ずつ様々ですが、「地域には大切な歴史と受け継がれてきた文化があり、それが地域の誇りとなっている。そして子供を含む若い世代の人たちにそれらを伝え、より良い地域コミュニティを形成することが求められている」ということは、お三方とも共通して話されていたと思います。今回の取材で非常に多くのことを学ばせていただきました。最後になりましたが、お世話になりました皆様からお礼を申しあげます。

参考文献

- ・ 寒川辰清『近江輿地志略』（弘文堂書店 一九七六年）
- ・ 大津市史編纂室『新修大津市史第一巻～十巻』（一九七八～八七年）
- ・ 関山和夫『仏教と民間芸能』（白水社 一九八二年）
- ・ 橋本章『近江の年中行事と民俗』（サンライズ出版 二〇一二年）
- ・ 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『湖国の祈りとそのかたち』（サンライズ出版 二〇一三年）
- ・ 大津市民俗文化財調査団編『大津市文化財調査報告書（9）真野のさんやれ祭り』（大津市教育委員会 一九七八年）
- ・ 都一美・川中常夫著『サンヤレ祭りの次第（現在の実施状況）』（二〇一一年）

注釈

- ① 「竹ヶ鼻・岡本・梅ヶ辻町」「南大路町」「中大路町」「池殿・御園口町」「山本町」の五組でそれぞれ行われる。
- ② 上の神田神社は、普門という集落が誕生したことで、下の神田神社から新たに勧請され、約一四〇戸の普門集落を氏子集落としている。
- ③ 一説には下河原という場所に神田神社があったとも言われている。
- ④ 日吉山王系の祭祀に見られる所作である。筆者が知るころでは、山王祭はもちろんであるが、小椋神社の仰木祭、和邇天皇神社の和邇祭、木戸樹下神社の五箇祭で見られる。祭礼を行う中心の集落から少し離れた集落の参加を促すために使いが出る。必ず七度半繰り返されるが現在はどの祭においても回数省略されたりしている。

⑤ Webサイト「近江祭百選 <http://www.eonet.ne.jp/~ounimatsuri/>」

⑥ 社会福祉法人「滋賀県社会福祉協議会」が主催する高齢者が高い知識や技術を身につけ、地域社会の担い手として自立できるよう支援するための学校

⑦ 下笠・志那・志那中・片岡・吉田・長東・矢倉の七つの地区

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第8号

発行日 平成31年3月●日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 西久松吉雄

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2019

ISSN 2186-6937